

# 1895年以前の台湾における茶文化の幕開け

— 「産業」としての茶 —

The Dawn of Tea Culture in Taiwan before 1895: Tea as an “Industry”

陳 怡臻\*

Yi – Chen CHEN

## はじめに

### 1. 研究の目的と対象

本稿は、清時代（1683年－1895年）の台湾を範囲とし、茶が産業として発展していく過程を考察する。ところで、なぜ「産業」としての茶なのか。茶は台湾において文化的な意義が付与され、「茶藝」として台湾の社会に現れてきたのは1977年、実はまだごく若い文化であることは、案外知られていない事実である。周知の通り、台湾の茶は清時代後期から第二次世界大戦が勃発するまで、「産業物」として経済発展に重要な役割を果たしてきた<sup>1</sup>が、なぜ1977

年になってから「茶藝」が生まれたのか。そして、現代台湾の茶文化はなぜこのような形を持っているのか。文化的な展開には豊かな産業背景が必要不可欠な要件であるからこそ、今後の研究に向けて台湾における茶文化の特質及び全体構図をつかむためには、まず茶藝が生まれる前の段階、つまり文化の茶の基盤である「産業としての茶」の台湾における幕開けの様子について俯瞰的におさえておく必要があると考えている。

### 2. 研究の方法

台湾における茶の発展を考えていく前に、前提として示しておきたいことがある。張宏庸『臺灣茶藝發展史<sup>2</sup>』（晨星出版、2002）によれば、通常の場合、「生産」と「消費」という二つの行為は互いに依存・補い合う関係性にあるはずだが、台湾の場合では茶の生産と消費はほぼ二

本の並行線だった時期が存在していたとされる。というのも、台湾で栽培・生産された茶は国内の「消費需要」に応じるために生産されたものではなく、「輸出目的」で生産された経済的産業物であったからである。なぜなら、清前期までの台湾では大陸移民の一部では喫茶習慣

\* 東京大学大学院学際情報学府博士課程

キーワード：台湾、茶文化、清時代、茶産業、移植、輸出

があるため、茶葉の「消費需要」はあったとされているが、彼らの消費対象となるのはあくまで大陸で生産された舶来茶であり、台湾で生産されたものではなかったのである。茶に対する消費需要はあったにもかかわらず、茶の生産促進に繋がるような、相互依存・影響し合う必然性は見受けられなかったと指摘されている。本

### 3. 先行研究と本稿の立場

これまで台湾経済史における数値的な研究の重鎮として、台湾で出版された文献といえばまずは林満紅氏『茶・糖・樟脳業與晚清臺灣』（臺灣銀行、1978）や同氏『四百年來の兩岸分合——一個經貿史的回顧』（自立晚報社、1994）など、主に清時代から戦後にかけての統計データに基づいた優れた研究があげられる。また、「消費・嗜好の茶」を主題とした文化史的な視角による研究は張宏庸氏『臺灣傳統茶藝文化』（漢光文化、1999）と同氏『臺灣茶藝發展史』（晨星出版、2002）が先駆けといえよう。さらに、清末以降（1858年 - 1895年）から日本時代にかけて経済史的目線で茶業の動向から台湾像を追求してきた、河原林直人氏が著した『近代アジアと台湾——台湾茶業の歴史的展開——』（世界思想社、2003）も本稿に大いに寄与する先行文献として取りあげたい。

これらの先行研究には清末や日本時代（戦前）を中心に論じられるものが多く、おそらくそれは台湾での茶の栽培は清時代後期から始まったことであったから、その時代を中心とした研究が多かったのであろう。しかし、それ以前の段階において、たとえまだ茶の栽培も輸出も記載

稿では、211年間にわたる清時代という範囲において、前述した「生産を目的とする茶」、つまり輸出品として発展していく茶産業をテーマに、各段階の特徴を年代順で関連史料を分析していき、それぞれの時代における社会背景から展開する様相の理由を考察する。

がほぼ見当たらなかったとしても、発展まで至らなかった原因をその時代その時代が持つ環境、すなわち地理的条件や社会背景から探りだす必要があると考えている。

ちなみに、台湾で出版された台湾茶文化をテーマとした文献では、経済学的、農学的、または文学・芸術的な視点による先行文献が数多くある。これまで台湾における茶に関する文献は概ね四つの系統に分けられる：①植物学・農学<sup>3</sup>：茶の栽培、製造技術など、②経済・産業史<sup>4</sup>：輸出データの統計分析など、③食文化<sup>5</sup>：茶の種類や道具の紹介、淹れ方など、④その他<sup>6</sup>：趣味としての心得、詩文集、活動記録などがある。

ところが、以上の先行研究からもわかるように、台湾の「茶」を対象とした歴史文化論的側面による学術的研究はまだ少ないのが現状である。なぜなら、台湾で正式に大陸茶の移植が始まったとされる1805 - 1810（嘉慶10 - 15）年から今日までの200年近くの間、茶は「文化的な役割よりも、輸出が目的とされる重要「産物」としての役割のほうが大きく、歴史も長いためであると考えられる。従って、本稿では

あえて史料考察を通じて茶が産業として形成され、発展していく構図を、その背景と対照しな

がら究明していく。

## 4. 本稿の構成

本稿では、台湾における茶産業が展開する過程を①開拓期、②野生茶と移植茶の記録、③「産業」としての幕開けとの三章に分けて考察を行った。まず、開拓期を第一章として、オランダ時代から清領前期までの台湾において、茶の栽培記録がほぼなかった原因について、各時代が持つ背景から分析し、発展に繋がらなかった理由を検討した。次に第二章では、清時代における野生茶の移植茶の発見記録を取り上げて、

台湾の茶産業における茶の系統の違いを明確にした上で、移植茶の伝来に関する諸説を概観した。最後に第三章では、「産業の茶」としての幕開けに焦点を当て、開港による外資進出や政府側が積極的に参入した様子について史料記録を提示しつつ、茶産業が飛躍的に発展していく上でのあらゆる環境整備の様子を論じてみた。以下では、台湾における茶の発展段階を簡略ながらまとめた。

表 1：台湾茶文化の発展段階一覧<sup>7</sup>（筆者作成、太字は本稿が考察する時代範囲である）

期別	年代	時代背景	内容	重要な出来事
第一段階	1600年～1861年	先史時代 オランダ・スペイン時代 明鄭時代 清時代前期	開拓期	・大陸から人が移住、開拓 ・野生茶の発見（薬用） ・茶の栽培は17世紀中期から
第二段階	1862年～1945年	清時代後期～ 日本時代	発展・ 成熟期	・本格的に輸出開始 ・台湾輸出産物物のトップ ・日本時代、茶の湯が台湾に進出
第三段階	1946年～ 現在	中華民国時代～現在	茶藝 成立・ 革新期	・1966 - 70年代、「中華文化復興運動」開始 ・1977年、「茶藝」が誕生 ・1980年代、茶芸館復興の起点 ・1990年代以降、日本文化ブームにより茶の湯思想が再び注目される

## 本論

### 1. 開拓期

#### 1.1 オランダ・スペイン時代（1624年-1662年）：原生茶の発見

台湾において茶が最初に発見できた記録はオランダ時代に遡る。本章では、本段階の台湾において茶の栽培が発展できなかった原因について考察する。まず背景には、市場的需要が低かつ

たことが原因として考えられる。しかし、なぜ一定階層の漢民族移民によって喫茶習慣は台湾に持ち込まれた可能性があるにもかかわらず、市場的需要が生じなかったのか。当時の台湾に

おける経済構造の特殊性が理由として考えられる。

台湾の経済構造について河原林（2003）が次のように指摘している：「台湾へ渡ってきた漢族系移民の生活は、大陸からの日用品や生活需要品の移入によって支えられるという独特の経済構造を持っていた。つまり、台湾は福建省や広東省などの対岸と極めて近距離にあったこと、台湾に移住した人々が対岸の社会と同一形態の生活を営んでいたために、台湾だけで独立した市場を形成せず、移民社会が作られた当初から対岸部とリンクする経済構造が形成されていたのである<sup>8</sup>。」このような市場形態におかれた台湾は、たとえ明鄭以降は海禁政策が頒布されても、閩貿易によって物資的な移動は止まることがなかった。そのため、漢人移民が好んで飲まれた舶来茶は、大陸から簡単に輸入することができる<sup>9</sup>。こうした環境のなかから、開墾地域での自然条件が不適合という背景はもとよ

## 1.2 明鄭時代（1662年-1683年）：空白期

この時期の台湾において茶に関する史料記録は見当たらなかったが、喫茶習慣はこの時期に伝来する可能性が全くないと言い切るのには難しい。というのも、台湾に移ってきた明将の人々の出自はほとんど大陸の南部出身であり、鄭氏政権の官民によって喫茶の風習を台湾に持ち込まれた可能性が高いとされる<sup>12</sup>。しかし、喫茶習慣自体が存在していたかもしれないというのに、なぜ茶の栽培記録が発見できなかったのか。その理由について、以下の二点が考えられる。

理由①、地理・気候の不適合：明鄭政権によ

り、台湾で茶を栽培するという市場的需要は生じなかったのではないかと考えられる。最初の発見記録は1645年バタヴィア総督による『バタヴィア城日誌』に残されている。

「茶樹はフォルモサにも発見せるが、これもまた土質による所あるか考えざるべからず。<sup>10</sup>」

ところが、野生茶樹が発見された記録があったものの、その茶の用途や生産といった報告は現時点では見当たらなかった。そればかりでなく、バタヴィア総督の記録を除いて、この記録があった1645年から台湾で薬用された野生茶の記録があった1717年までの72年間、野生茶樹に関する発見記録も利用記録も見つかっていない。当時の台湾では米、砂糖や鹿革の輸出がメインで、オランダ人は1636年から廈門から茶葉を買い取り、台湾を南洋諸国へ輸送するターミナルとして利用したものの、栽培までは至らなかったとされている<sup>11</sup>。

統治勢力はほぼ南部にとどまっていた。南部は平原地形が多く茶の栽培に不向きで、かつ「荒溪型」という気候で冬の降雨が極端に少なく、冬に溪流が乾涸びいてしまうほど水源の確保が難しい。こうした地理的条件によって茶の栽培に至らなかったのではないかと考えられる。

理由②、食料栽培を優先：明鄭政権が台湾における勢力や発展の中心はオランダ政権に開発された範囲とほぼ変わらず、農業生産も、オランダ時代の開拓をほぼそのまま継承した。オランダ時代では茶の生産が行われておらず、その上、清と対峙していたという不安定な時代で

あったゆえ、収穫できるまで三年以上の月日も要する茶の栽培よりも、食料になるものを優先

### 1.3 清時代前期（1683年–1810年）：停滞期

周知のように、清時代前期の台湾では、社会全体的に発展がほぼ停滞していた。なぜなら、清は台湾に対して関心がなかったからである。もとより、清が台湾に興味を示したのは鄭氏勢力を排除するためであって、それを達成したのちは省みない風潮が存在していた<sup>14</sup>。財政や管理の難しさが懸念され、朝廷では台湾を治下に置くか否かについて議論が重ねられた<sup>15</sup>。治下に置くことになっても、清の台湾支配は最後の30年間になるまで極めて消極的な統治であった。前期となる百年近くの間、反清勢力が多い

的に栽培されることはごく自然な流れであろうと范（1992）<sup>13</sup>は示唆している。

ため、台湾を「化外の地」として放任していたのであった。その影響から開発が停滞してしまい、産業物として茶の発展などは、清時代の後期になって列強から脅威にさらされてからのことである。以上述べてきたように、台湾における茶の栽培に関する方針はオランダ時代から清時代前期までは概ね同様で、たとえ個人単位で栽培された茶はあったとしても、政府による関与、または産業としての性格はまったくなかったと考えてよかろう。

## 2. 野生茶と移植茶の記録（1717年–1861年）

### 2.1 野生茶の産地と用途

台湾に原生する「野生茶樹」の発見記録はオランダ時代に遡るが、その茶樹の性質や用途に関する記録がなかったため、謎が解けないままである。その後、台湾で原生する茶が利用されたという記載は、清時代になってから初めて文献<sup>16</sup>の中に発見される。

ところが、張（2002）<sup>17</sup>によると、台湾における野生茶の発見と利用はあくまで薬用としたのであって、のちに大陸より茶種が移植され、一大産業として発展していく「茗茶」とよばれる嗜好として飲まれる茶とはまったく関係がないと示唆されている。ではなぜ、ここであえて野生茶について言及する必要があるのか。張氏の研究以外、諸先行研究が野生茶に関し検討す

ることは少ないなか、本稿では台湾の茶文化史を俯瞰的に考察していくにあたって、商品として輸出する茶は台湾原生茶（＝野生茶）ではなく、大陸から移植されたものだというルートをはっきりさせるために、張氏の説を踏まえた上、台湾の野生茶に関する記載や当時どのように飲用されていたのかについても、明確に示しておく必要があると考えている。

オランダ時代に野生茶の発見記録はあったものの、利用に関する記載が清になってからようやく発見された。当時の台湾における茶の発見について、1717<sup>18</sup>（康熙56）年周鍾瑄『諸羅縣志』巻十の「物産志」には、野生茶に関してこう記している。

「茶經：茶者、南方嘉木、北路無種者。水沙連<sup>19</sup>山中、有一種、味別、能消暑瘴。武夷、松蘿諸品、皆自內地也<sup>20</sup>。」

訳：茶經：茶は南方に生長する樹木であり、北の地域では見かけない。水沙連の山奥に一種の（野生）茶があり、特徴的な味で夏バテ効果があるとされている。なお当時では、武夷、松蘿といった（筆者注：嗜好用）茶は皆大陸からの輸入品であった。（括弧・下線・注は筆者による）

上記の史料からは、当時の「飲用」茶は大陸の輸入品であり、野生茶は夏バテ治療薬にすぎず、味は普通の茶と異なることについても確認できる。さらに、同書卷十二の「雜記志・外紀」には、野生茶の利用状況にあたって問題点も述べられている。

「水沙連内山茶甚夥、（中略）然路險又畏生番、故漢人不敢入採、又不諳製茶之法。若挾能製武夷諸品者、購土番採而造之、當香味益上矣<sup>21</sup>。」

訳：水沙連の地に野生の茶が多く出産しており、（中略）しかし、山道の険しさや言語の通じない先住民が原因で、大陸人が山に入り採ることができず、先住民も移民も茶の製法をよく知らない。もし茶の製造に詳しい者を連れ込み、先住民に採ってもらった茶を買取り精製すれば、必ず香りのよい茶にすることができるはずであろう。

## 2.2 外来種茶の移植：台湾茶<sup>26</sup>の始まり

前節までは、台湾の野生茶はのち産葉物として栽培・輸出された茶とは実は別物ということについて確認した。本節では、茶はいつ大陸か

周氏の記録では、水沙連に野生茶が発見されたが生産まで及ばなかった原因について、①道の険しさ、②生番<sup>22</sup>との衝突の恐れ、③茶の製造方法に詳しい人がいないという三つの原因があると述べられている。ところで、1722年（康熙61）初代巡視臺灣監察御史である黃淑璫『臺海使槎錄<sup>23</sup>』卷三の「赤崁筆談・物産」という項目から、前掲した史料にて挙げられた問題点がすでに解決されていることがわかる。

「水沙連茶在深山中、叢木蔽虧、霧露濛密、晨曦晚照總不能及。色綠如松蘿、性極寒、療熱症最效。每年通事於各蕃議明、入山焙製<sup>24</sup>。」

訳：水沙連茶は山奥にある。その地の木々が空を覆うように茂密で、霧露も濃く、夜明けと夕日の光も届かないほど薄暗い。色は松蘿に似て、性質的には寒性に属しているため夏バテには最も効くとされる。毎年、通訳を立てて各先住民と談議した上、山奥に入り製茶を行う。

上記史料からは、1722年の時点で漢人は毎年通事を介して先住民と契約を結んで入山し、茶を製造していたことが確認できる。当時はあくまで薬用として精製されるものであり<sup>25</sup>、嗜好品や輸出のための物とは全く無関係であった一方、この頃の台湾において茶を精製・加工する技術を持つ人物が滞在・存在していたという貴重な情報もこの史料によって判明した。

ら台湾に移植され、どのように栽培が行われていたかについて、連横『臺灣通史<sup>27</sup>』「農業志」に基づいて台湾茶のはじまりを検討したい。



「臺北産茶約近百年。嘉慶時有柯朝者、歸自福建。始以武彝之茶<sup>28</sup>、植於口<sup>29</sup>魚坑、發育甚佳。既以茶子二斗播之、收成亦豐、遂相傳植。蓋以臺北之地多雨、一年可收四季、春夏為盛。茶之佳者、為淡水之石碇文山二堡。次為八里坌堡。而至新竹者、曰埔茶、色味較遜、價亦下<sup>30</sup>。」

訳：台北で茶を生産する歴史は約百年に及ぶ。嘉慶朝に福建出身の柯朝という者によって最初に武夷茶を台北に移植し、収穫が良かったため、更に茶種二斗を植え足したところ収穫の結果も良く、そこから茶の栽培が広まっていったのである。何しろ台北は雨が多く、一年に四作もできるが、その中でもとりわけ春と夏の生産が盛んである。産地から見れば、淡水庁の石碇堡・文山堡産の茶が良いとされ、その次は八里坌堡である。なお、新竹にも埔

茶と呼ばれる茶の生産があるが、色や味は（注：台北の茶と）比較にならないため、値段も安い。

先行研究の多くは『臺灣通史』の内容を台湾茶の起源として取り上げてきているが、張（2002）だけが違う持論を示している。張氏によれば疑問点が二つある。一つ目は、柯朝という人物に関して、他には連氏の説の裏付けとなる史料が発見できなかったことである。二つ目は、『臺灣通史』の上梓は1918年で、もし連氏の説が正しければ、1796年から1918年まで百年以上の間に、なぜこれほど大事な人物に関して一つも記録が見当たらなかったのか、と信憑性に対し再検討を求めている。残念ながら、現時点では新たな関連記録の発見はまだできておらず、引き続きこの人物や史料の典拠を調査していきたい。

### 3. 清後期：「産業」としての幕開け（1862年-1895年）

#### 3.1 台湾開港と外資の進出

211年間にもわたる清時代は、後半の1862-1895（同治1-光緒21）年になると、ようやく台湾茶産業史にとって重要な発展期に突入する。台湾茶が重要な産業物として脚光を浴びるようになったきっかけは、天津条約と北京条約による開港である。清後期の台湾は、開港によって産業的構造が大きく変化をみせた。外資によって茶への投資開発がいつそう加速され、茶が産業物として確立する第一歩はここから歩み始めたことは、諸先行研究において同じ見方が踏襲されている<sup>31</sup>。

当時、台湾では多くの外資が貿易と並行して

輸出に適する産物の調査開発を進めていった。寶順洋行を設立したイギリス人 John Dodd<sup>32</sup>氏もその一人で、彼こそ台湾における外来種茶の栽培に重要な貢献をもたらした人物であると張（2002）によって評されている<sup>33</sup>。以下では、初代アメリカ駐フォルモサ領事の James W. Davidson 氏が著した『The Island of Formosa, Past and Present<sup>34</sup>』「The Formosa Tea Industry」一章には、Dodd氏が台湾にて茶業を携わった経緯について記されている：

「John Dodd, who had established himself in the island the year before made, in

1865, inquiries among the Tamsui farmers as to the possibilities of the trade. The next year some purchases were made, some Tea plant slips were brought from Ankoï in the Amoy district, and loans were made to the farmers to induce them to increase the production. Kosing, a Chinese who had arrived from Amoy in the interests of Tait & Co., shipped a few packages in 1867, and John Dodd made a shipment to Macao, which brought good prices. Satisfied with the prospect he commenced Tea firing in Banka. Previous to 1867, the unfired leaf had been sent to Amoy in baskets to be fired there, but from 1868 onwards the total export was prepared for

### 3.2 発展環境の整備：政府の介入

前節にて述べたように、外資の開発により台湾での栽培－精製－輸出の連動が一気に可能になり、河原林（2003）は、開港によって世界市場と結ぶことによって得られた極めて大きな経済結果があり、茶業の勃興もまさにその経済結果によってもたらされたものであると指摘している<sup>37</sup>。そこで、政府側も茶産業がもたらす利益により積極的に目を向けるようになった。当時政府が先住民族に茶の栽培を進める様子について、1877（光緒3）年「臺灣府轉行臬道夏獻綸查勘中路埔裏各社籌辦事宜」<sup>38</sup>では、次のように述べられている。

「民番在內者，耕種之法多不講求；且乏水利，一遇乾旱，即致歉收。其種茶之地不少，惜不善藝植、不諳焙製，故產不甚旺而風味亦欠佳。

shipment direct to foreign lands, by skilled Chinese workmen brought from Amoy and Foochow<sup>35</sup>.」

要約すると、1862年の滬尾（＝台北淡水）開港に伴い、1865年来台したJohn Dodd氏は、台湾北部の地理や気候が茶の栽培に適合していることに気づき、Dodd氏は大陸（Ankoï）から入手した茶種を栽培させ、収穫をすべて買いとり、その上大陸から職人を招いて北部の艋舺（＝台北萬華）で精製工場を立ち上げた。以降、台湾産茶は大陸での加工を介せずにそのまま欧米に輸出することが可能となり、台湾における茶の栽培・生産・輸出の勢いが一気に強まり、やがて茶は砂糖、樟腦と並ぶ当時の三大経済産物<sup>36</sup>となったのである。

職道與中路同知彭丞商酌，擬在彰化一帶招僱良農數名入內，教以耕作；並僱茶匠二名，教以藝植、焙製；俾民生日裕，風氣日開。<sup>39</sup>

訳：先住民は耕作に対してこだわりがなく、更に水利の便も欠けており、旱魃が起きるたびに直ちに不作になってしまう。その地域には茶を栽培しているところは多いが、惜しくも栽培法や精製法に長けず、そのため産量もいまひとつで風味も良くない。（その状況を改善するために）拙者は中路同知（注：中部管轄官名）彭丞と参議した結果：まずは彰化あたりで良農を数名雇い、山に入らせ耕作を教えさせる。次は、茶匠を2名招き、栽培と精製を教えさせるといい。そうすれば、必ず日に日に豊かになり、民風もますます進歩



できるであろう。(下線は筆者による)

以上の史料からも読み取れるように、この時点では清政府はすでに茶がもたらす経済的価値について十分に認識していることがわかる。後期になれば北部の港に近い山地はすでに外資たちによる開発が進められたため、先手が打たれた政府は、降水が多く排水性も良い先住民が住む山地に目を向けたのである。もちろん、政府が狙っているのは茶の経済的な価値ばかりでなく、栽培開墾を通じて先住民を「教化」、つまり先住民に漢人の風習を習わせることで、民風を改善し、さらに生活水準を上げることも期待されていることは上記の史料にて確認できる。

こうして、茶を栽培する農耕地面積がいっそう拡大され、茶の生産・輸出量が更に増加した。そのほかに、張(2002)は、台湾首任巡撫(首長)劉銘傳が任期中において台湾茶や茶業界の品質の改善を図るために、土地の再編やこれまでの生産・販売システムの整頓を図り、①「茶郊永和興」(=茶業共同組合)や②「茶釐(=茶税)總局」を設立し、もともと茶行主導の不透明な生産・販売(輸出)体制から政府主導へと切り替えさせ、これによって1893年の台湾における茶の輸出量は国内一位に達したと示している。

ところで、もともと北部を中心とした茶畑は清末になると中部地方は開山政策による開墾が進み、産量が増大するにつれ、港まで輸送する手段の必要性が喫緊の課題になってくる。しかし小さな島である台湾はもとより海の便は良いはずであったが、交通における地理的条件が悪く、往来運輸の不自由さがネックとなってい

た。というのも、台湾は南北に細長く、東側半分以上は険峻な山地が占め西側の平地も狭い上、傾斜の急な河川によって分断されているため水利の便が乏しく、自由な交通往来が限定されていた。第二に、台湾の開発や文化発展は南(台南が最初)から北へと展開していくが、南や西側の海岸は河の沈積によって良港がなく、輸出のために良港のある北部(淡水・基隆)を頼るものの、北部まで物産を運送するのに不便な上コストも高い。第三に、河原林(2003)が指摘したように、移民も先住民も、異なる出身地や言語による交流の欠如<sup>40</sup>は台湾が局地的な市場に留まった理由であるという。そこから派生したコミュニケーションの不自由さも、問題の一つとして考えられよう。言語が通じ合わなければトラブルも絶えようがなく、流通においてもおそらく同様にトラブルが多かったのではないかと推測できる。そこで、鉄道を建設することによりそういった地理的・言語的な不自由な部分が補われ、産業発展に障る不安定要素も軽減できるのではないかと考えられる。このような背景のなかから、1887年(光緒13)劉氏が光緒帝に上奏した公文書「臺灣巡撫劉銘傳奏擬興修臺灣鐵路摺<sup>41</sup>」では、台湾において鉄道建設の必要性について力説している。

「(前略) 伏查臺灣孤懸海外，物產蕃盛；非興商務不足以開利源，非造鐵路不足以興商務(後略)」

訳：台湾は海外に孤立しており、物産資源が非常に豊富である。ただ、これら豊富な資源を商業に使わせなければ、利益に繋がることがない。また商業を振興するためには、鉄道なしでは叶えることができまい。(下線は筆

者による)

上記の史料は、劉氏が台湾での鉄路建設を朝廷を説得するために直接皇帝に呈上した公文書である。結果的に劉氏の提言が採用され、清国における第一号の公営鉄道は1891年に基隆～台北間、二年後の1893年には台北～新竹間が完成された<sup>42</sup>。この史料では鉄道と茶産業との

## おわりに

第1章では、オランダ時代から清時代前期にかけて茶に関する栽培記録が見つからなかった原因について考察した。オランダ時代『バタヴィア城日誌』には野生茶の発見に関する記述は残されたものの、オランダ時代では開墾の中心は南部だったため、地理的・気候的要素に加えて、不安定な社会情勢からもたらす食糧生産の優位傾向などもその原因として考えられる。

清時代において、統治当初から開港になるまで「生産」に関する記録が発見できなかった背景には、当時の台湾社会における発展が停滞していたことが原因として見受けられよう。明鄭政権後、もともと台湾に関心を示さなかった清朝廷は台湾を100年以上の間を「化外地」として放置しており、社会上においても紛争が絶えなかったため、茶を産業として発展できるような環境ではなかったと思われる。一方、野生茶については1717年から書物に現れるようになったものの、大陸から輸入される嗜好用の茶とは別に、薬用としての性格が強く、のちに移植されて産業として発展していくこととなる茶とはまったく関係のない系統であることも確認できた。

関連性について直接言及されていないが、鉄道の開通によって、茶の輸出は産地から工場、工場から港口、さらに基隆から海外へと一段とスムーズになった。こうして、発展していく上で必要な機構や条件が整えられ、より交易しやすく輸出しやすい環境がようやく形成されたのである。

ところが、清後期になって、列強に負けた清は台湾を開港した。それにともない外資が進出し、台湾が茶の栽培に適していることを発見した。ここから、茶は産業物として一躍脚光を浴びることとなる。最初の頃、台湾で茶の栽培・生産・製造を手掛けたのは専ら外資だったが、のちに政府もその利権に参入しようと産業発展に向けて様々な政策を練り出していった。こうした一連の動きによって、台湾における茶は主要産業物にまで登り詰めることとなる。河原林(2003)では、台湾における経済発展について「台湾は近代以前の段階においてある程度経済発展の素地を整備していたのである。ただし、それは全てが自生的に得られたものではなく、台湾島外との経済的關係によって誘発される側面も存在していた」との指摘の通り、清政府が台湾に対する関心の変化による茶産業へ積極的に参入、茶の輸出に向けて投入した環境整備なども、まさにその誘発された一側面として考えられるのではないかと。

今回はオランダ時代から清時代後期、すなわち台湾における茶の発見や移植の起源から、産業として発展するまでの道のりを一通り整理し

てみた。これまで台湾の茶に関する文献は、産業・経済・農学または嗜好視点による著作が多くあるなか、学術的な文献が少なく、一般人向けの教養内容がほとんどであったため、出典の扱い方も十人十色で、時には信憑性が危ういものまで散見される事実は否めない。そんな中、本稿は一次史料を収集し、これまでの先行研究の諸説を傍証できるものをさらに整理・分析を

試みた。今後の課題として、台湾の茶が「茶藝」として創成される歴史的背景や系図を政治史を軸に探るために、成熟期となる日本時代の発展様相について史料調査を行い、戦後、茶が一産業から文化へと変容していく過程を追究していく。最終的には、現代における台湾茶文化が持つ独自の個性やメカニズムへの解明に少しでも寄与できればと期待している。

## 註

- <sup>1</sup> 河原林直人『近代アジアと台湾：台湾茶業の歴史的展開』（世界思想社、2003年）、187頁。
- <sup>2</sup> 張宏庸『臺灣茶藝發展史』（晨星出版、2002年）、24 - 25頁。
- <sup>3</sup> 代表的なものとして、林木連『臺灣的茶葉』（遠足文化、2010年）、呉徳亮『台北找茶』（民生報、2004年）、阮逸明、『樂活茶緣』（五行圖書出版、2013年）、廖慶樑『臺灣茶聖經』（揚智文化、2010年）など。
- <sup>4</sup> 例として林滿紅『茶・糖・樟腦業與晚清臺灣』（臺灣銀行、1978）、同氏『四百年來の兩岸分合——一個經貿史的回顧』（自立晚報社文化出版部、1994年）、または陳慈玉『台北縣茶業發展史』（稻鄉出版、2004年）、范增平『臺灣茶業發展史』（台北市商業同業公會、1992年）などがある。
- <sup>5</sup> 蔡榮章『茶道入門三篇——製茶、識茶、泡茶』（中華書局、2006年）など。なお、前掲した阮逸明、『樂活茶緣』（五行圖書出版、2013年）、廖慶樑『臺灣茶聖經』（揚智文化、2010年）にも一部食文化に触れる内容がある。
- <sup>6</sup> 蔡榮章『現代茶道思想』（臺灣商務印書館、2013年）、解致璋『清香流動——品茶の遊戯』（遠流出版、2008年）、などが代表的である。
- <sup>7</sup> 清の始まりは1616年、北京入城したのが1644年、台湾を統治しはじめたのが1683年である。
- <sup>8</sup> 河原林（2003）、5頁。
- <sup>9</sup> 張（2002）24、26、30、90頁。
- <sup>10</sup> 村上直次郎訳注・中村孝志校注『バタヴィア城日誌（巻2）』（初出1645年、平凡社、1972年）、339頁。
- <sup>11</sup> 許賢瑤『荷蘭時代在臺灣的茶葉貿易補論』（台北文獻、1996年）、張宏庸『臺灣茶藝發展史』（晨星出版、2002年）などの先行研究では、この件に関しては同様な見解を示されている。
- <sup>12</sup> 廖慶樑『臺灣茶聖經』（揚智文化、2010年）、15頁。
- <sup>13</sup> 范增平『臺灣茶業發展史』（台北市商業同業公會、1992年）、63 - 64頁。
- <sup>14</sup> 河原林（2003）、8 - 9頁、41頁。中村孝志『台湾史概要（近代）』（『季刊民族学研究』第18巻、第1、2号、1954年）、118頁。
- <sup>15</sup> 施琅『靖海紀事』（臺灣文獻叢刊第13種、臺灣銀行、1958年）、臺灣銀行經濟研究室編『清聖祖實錄選輯』（臺灣文獻叢刊第165種、臺灣銀行、1963年）をご参照のこと。
- <sup>16</sup> 当時の諸羅県知県周鍾瑄が編纂した、主に台南以北の地域が対象範囲となる県史『諸羅縣志』（初出1717年、臺灣文獻叢刊第141種、臺灣銀行、1962年）、194頁。台湾野生茶に関する他の記述は、陳桂培『淡水廳志』巻15（初出1871年、臺灣研究叢刊第46種・臺灣方誌彙刊巻1、臺灣銀行、1956年）、陳肇興『陶村詩稿』（初出1859年、臺灣文獻叢刊第144種、臺灣銀行、1962年）、藍鼎元『東征集』（初出1722年、臺灣文獻叢刊第12種、臺灣銀行、1963年）などにも散見される。
- <sup>17</sup> 張（2002）、24頁。
- <sup>18</sup> 同じ史料を扱った張（2002）では、30 - 31頁にかけて康熙年と西暦が一致しなかった箇所がいくつか確認できる。康熙56年は西暦1717年で、康熙61年は西暦1722年であることをここで訂正させていただく。
- <sup>19</sup> 水沙連：「水」は台湾中部にある日月潭のことで、かつては「水裡社」という先住民の部落があり、「水裡湖」などでも呼ばれていた。また、「沙連」とは、当時彰化地区にある平埔族が水裡湖近くに住む「生蕃」を「Sarian」と呼ぶことから、音訳して漢字の「沙連」（中国語読み：シャリーエン）と表記された。正確的には沙連堡、五城堡、または埔里社堡の辺りである。張（2002）、34頁。

- <sup>20</sup> 周 (1962年)、194頁。
- <sup>21</sup> 前掲、295頁。
- <sup>22</sup> 生番・熟番：番＝蕃、「未開化な野蛮人」という差別的な意味があり、今日の台湾では先住民族に対して使わない。生蕃とは、清政府に帰せず、大陸人の言語風俗に染まっていない先住民のことを指す。大陸移民との接点が少ない山地の先住民を意味する場合が多い。熟蕃とは、清政府に服属して税金も納め、大陸移民の言語風俗に染まっていたいわゆる「漢化」した先住民のことで、大陸移民との交流が発生しやすい平原部の先住民を意味することが多い。沼崎一郎『台湾社会の形成と変容～二元・二層構造から多元・多層構造～』（東北大学出版会、2014年）、26頁。
- <sup>23</sup> 初代巡視臺灣監察御史である黃淑墩が台湾の地理・風土・先住民族について考察して記した書物である。
- <sup>24</sup> 黃淑墩『臺海使槎錄』卷3（臺灣文獻叢刊第4種、臺灣銀行、1957年）、63頁。
- <sup>25</sup> 日本時代から中南部の野生茶樹の調査が行われ、終戦後に台湾茶葉改良場は日本学者北村四郎、橋本実両氏との共同研究では、台湾の野生茶樹はアッサム種によく似ている種類で、紅茶の製造に適合しているとうまくその性質を判明したのである。許賢瑤「台湾茶の歴史～とくに日治時代の台湾茶と包種茶の歴史」（『O - CHA 学』第7号、2015年）、10頁。
- <sup>26</sup> 台湾茶：原生種の台湾野生茶を除き、本稿では大陸から持ち込まれて台湾で生産された外来種茶のことを「台湾茶」と表記する。以下同。
- <sup>27</sup> 連横が日本による台湾統治に刺激を受け、1908年から10年間かけて著した史書である。司馬遷『史記』の紀伝体にならった台湾人による最初の史書として評判は高い一方、一部史料の扱い方、誤りや創作などの問題点も後世の史学者によって指摘されている。
- <sup>28</sup> 福建産の武夷茶。
- <sup>29</sup> 魚に架、現在台北の瑞芳地区を指していると思われる。張 (2002)、37 - 38頁。
- <sup>30</sup> 連横『臺灣通史』（臺灣文獻叢刊第13種、臺灣銀行、1962年）、654頁。
- <sup>31</sup> 張 (2002)、42 - 45頁。河原林 (2003)、9頁。
- <sup>32</sup> John Dodd : (1838年 - 1907年) スコットランド出身の貿易商人である。1866年来台して樟腦・茶葉市場を調査し、「寶順洋行」(Dodd & Co.) を作った。1867年には怡和洋行 (Jardine, Matheson & Co.) 代理商となり、翌1868年には台湾に烏龍茶の精製工場も設け、直接外国へ輸出するようになった。のちに「台湾烏龍の父」または「台湾茶葉の父」と呼ばれる。張 (2002)、45 - 47頁。
- <sup>33</sup> 張 (2002)、45 - 47頁、267 - 268頁。
- <sup>34</sup> James W. Davidson, The Island of Formosa, Past and Present (Macmillan & Co.,1903) は、当時の台湾の社会・産業様相などについて記録している書物である。
- <sup>35</sup> 前掲、373 - 374頁。
- <sup>36</sup> 張 (1999)、82 - 83頁。
- <sup>37</sup> 河原林 (2003)、12頁。
- <sup>38</sup> 臺灣銀行經濟研究室編『劉銘傳撫臺前後檔案 (第二冊)』（臺灣文獻叢刊第276種、臺灣銀行、1969年）に収録された「臺灣府轉行臬道夏獻綸查勘中路埔裏各社籌辦事宜」は、1877年 (光緒3) 当時の按察使銜分巡臺灣兵備道である夏獻綸が視察後に記した報告書である。
- <sup>39</sup> 前掲、14 - 16頁。
- <sup>40</sup> 河原林 (2003)、13頁。
- <sup>41</sup> 『清季臺灣洋務史料』（臺灣文獻叢刊第278種、臺灣銀行、1997年）。
- <sup>42</sup> 李筱峰・林呈蓉『臺灣史』（華立圖書、2004年）、138 - 140頁。

## 参考文献

### 【史料】

- 村上直次郎訳注・中村孝志校注『バタヴィア城日誌 (巻2)』（平凡社、1972年）
- 黃淑墩『臺海使槎錄』卷3（臺灣文獻叢刊第4種、臺灣銀行、1957年）
- 連横『臺灣通史』（臺灣文獻叢刊第13種、臺灣銀行、1962年）
- 劉銘傳『劉壯肅公奏議』（臺灣文獻叢刊第27種、臺灣銀行、1958年）

臺灣銀行經濟研究室編『清季臺灣洋務史料』（臺灣文獻叢刊第 278 種、臺灣銀行、1997 年）  
臺灣銀行經濟研究室編『劉銘傳撫臺前後檔案（第二冊）』（臺灣文獻叢刊第 276 種、臺灣銀行、1969 年）  
唐贊袞『臺陽見聞錄』（臺灣文獻叢刊第 30 種、臺灣銀行、1981 年）  
朱仕玠『小琉球漫誌』（臺灣文獻叢刊第 3 種、臺灣銀行、1957 年）  
朱壽朋『光緒朝東華續錄選輯』（臺灣文獻叢刊第 277 種、臺灣銀行、1969 年）  
周鍾瑄『諸羅縣志』（臺灣文獻叢刊第 141 種、臺灣銀行、1962 年）

【文獻・研究論文】

（中文）

陳慈玉『台北縣茶業發展史』（稻鄉出版、2004 年）  
范增平『臺灣茶文化論』（臺灣碧山巖出版社、1987 年）  
同『臺灣茶業發展史』（臺北市商業同業公會、1992 年）  
李筱峰・林呈蓉『臺灣史』（華立圖書、2004 年）  
廖慶樑『臺灣茶聖經』（揚智文化、2010 年）  
林復泉『烏龍茶及包種茶製造學』（臺灣省政府農林廳茶業傳習所、1956 年）  
林滿紅『茶・糖・樟腦業與晚清臺灣』（臺灣銀行、1978 年）  
同『茶、糖、樟腦業與臺灣之社會經濟變遷（1860 - 1895）』（聯經出版、1997 年、前掲書の増訂版）  
同『四百年來的兩岸分合——一個經濟史的回顧』（自立晚報社文化出版部、1994 年）  
林木連ほか『臺灣的茶業』（遠足文化事業、2003 年）  
阮逸明『樂活茶緣』（五行圖書出版、2013 年）  
許賢瑤『荷蘭時代在臺灣的茶業貿易補論』（臺北文獻、1996 年）  
張宏庸『臺灣傳統茶藝文化』（漢光文化事業、1999 年）  
同『臺灣茶藝發展史』（晨星出版、2002 年）

（和文）

陳怡臻「台湾茶芸文化の成立——近代以降日本茶の湯との比較研究」（東京大学学際情報学府修士学位論文、2015 年）  
河原林直人『近代アジアと台湾：台湾茶業の歴史的展開』（世界思想社、2003 年）  
角南聡一郎「モノからみた台湾茶文化」（『アジア遊学 88：アジアの茶文化研究』、勉誠出版、2006 年）  
劉進慶「清末台湾における対外貿易の発展と資本蓄積の特質（1858～1895 年）」（『東京経大会誌』第 138 号、1984 年）  
松下智「台湾の茶」（『茶業研究報告』第 34 号、1971 年）  
中村孝志「台湾史概要（近代）」（『季刊民族学研究』第 18 卷、第 1、2 号、1954 年）  
沼崎一郎『台湾社会の形成と変容～二元・二層構造から多元・多層構造～』（東北大学出版会、2014 年）  
佐渡友雄基「台湾茶芸文化の発展」（『中国言語文化研究』第 3 号、佛教大学中国言語文化研究会、2003 年）  
王静『現代中国茶文化考』（思文閣出版、2017 年）  
許賢瑤「台湾茶の歴史～とくに日治時代の台湾茶と包種茶の歴史」（『O - CHA 学』第 7 号、2015 年）

（英文）

James W. Davidson, The Island of Formosa, Past and Present (Macmillan & Co., 1903)  
Victor H. Mair, Erling Hoh, The True History of Tea. (Thames & Hudson, 2009)  
William H. Ukers, All About Tea. (Kingsport press, INC., 1935)





陳 怡臻 (ちん・いしん)

[生年月] 1985年9月

[出身大学または最終学歴] 東京大学大学院学際情報学府修士課程修了

[専攻領域] 歴史文化論

[主たる著書・論文] (3本まで、タイトル・発行誌名あるいは発行機関名)

修士学位論文「台湾茶芸文化の成立－近代以降日本茶の湯との比較研究」(東京大学大学院学際情報学府、2015年)

[所属] 東京大学大学院学際情報学府博士課程

[所属学会] 史学会、日本生活文化史学会、茶の湯文化学会

# The Dawn of Tea Culture in Taiwan before 1895 : Tea as an “Industry”

Yi-Chen CHEN\*

The first record of Taiwanese indigenous tea tree is from 1645, during the Dutch Formosa period. However, it is not until the era of Qing rule (1683-1895) that we see in archives for the first time records of Taiwanese tea being consumed, initially “for medicinal purposes” . Otherwise, from the Dutch Formosa period to the era of Kingdom of Tungning (1661-1683), no record is found of indigenous tea consumed for non-medical purposes, or about the cultivation of introduced varieties of tea.

Beginning with the second half of the Qing period we start to see bigger changes to the development of Taiwanese tea. With increasing immigration from Mainland China begins the cultivation of introduced varieties of tea. Furthermore, the exploitative actions taken by Western trading companies brought attention to the potential of tea as cash crop. As a result, the government took measures to increase the economic value of tea, and the tea trade became big business in Taiwan.

As pilot work for a bigger research project to clarify the transition process of Taiwanese tea from “industry” to “culture” , this paper aims to, firstly, trace the history of Mainland Chinese tea being transplanted and introduced to Taiwan, and secondly, to examine the process by which “Formosa Tea” gradually became an important export. This paper mainly uses policy documents from 1645 to 1895 to examine Taiwanese tea as an industry.